

特集

# 3/12(日)、桑山紀彦さんの 「地球のステージ」で開会!

NGO列島縦断フォーラム北海道ブロック大会

「北の大地から地球のステージへ」

- NGO活動を通じて持続可能な社会・平和な世界をめざして -

山形県山形市に本部をおくNPO法人「地球のステージ」は、ライブ音楽と大画面の映像、スライドに語りを組み合わせた新しいタイプの「非営利」「コンサート・ステージ」です。代表理事の桑山紀彦さんは精神科医で、医療支援に入った紛争地域や災害の被災地などの難民キャンプや貧困地域で出会った人たちの現状を映像にまとめて紹介し続けています。

去る3月12日には、(社)国際農林業協力・交流協会(東京都)などが札幌市で開催した「NGO列島縦断フォーラム北海道ブロック大会」の基調メッセージとして「地球のステージ1」の公演が行われました。北海道内では北海道当別高等学校(石狩管内当別町)で最初の公演が行われて以来、北海道国際協力フェスタ(札幌市)、国際協力の行事など何度も公演が行われ、多くの参加者の感動を呼んでいます。

「地球のステージ」の活動の紹介と、今回のフォーラムの分科会、全体会の様子をお伝えします。

## 「地球のステージ」とは?

桑山紀彦さんは、「地球のステージ」で自作の曲を弾き、歌い、語りながら、今、世界で起きている様々な出来事やそこに暮らす人々を自ら記録した映像やスライドで紹介している。

「地球のステージ」が始まったのは1996年1月15日であった。最初は山形県内を中心に年20~30回の公演をしていた。その後公演場所が全国に広がってNPO(特定非営利活動法人)として独立した2002年頃には通算して300回の公演を行っていた。2005年10月末には全国で1000回の公演を記録した。今年はスタートから10年目になる。

公演の8割は学校行事、PTAの研修会など学校が会場になっているが、その他各地の有志による実行委員会、青年海外協力隊訓練所(二本松と駒ヶ根の両訓練所で派遣される海外協力隊員の訓練終了時に公演)、国際交流のイベント、婦人会などの主催で公演が行われている。

桑山さんは学生時代に貧乏旅行でアジアを中心に17カ国を回った。当初はNGOともボランティアとも無縁の旅で、むしろ「自分にはそんなことは関係ない!」という気持ちであったという。それがフィリピンで一人の少女に出会った時、運命が変わった。親を失って満足に住む家もない子どもたちや、当時マニラにあったスマーキーマウンテンという広いゴミ捨て場、そのゴミの山に生活の糧を求める人たち。貧しい生活にもかかわらず笑顔さえ見せてくれる子どもたちに出会った。

戦乱、争乱できっと焦土と化しているに違いないと思いながら行ってみると、思いもかけず子どもたちの笑顔に迎えられたり、死にかけていた子どもが助かって大きな喜びを体験した。そのような経験からボランティア活動への道に進んでいったことなどが「地球のステージ1」の中で語られる。

以来、カンボジア、ソマリア、フィリピン、東ティモール、旧ユーゴスラビアなどの紛争地域、また最近は2005年10月に起きたパキスタン北部の地震被災地での医療支援や緊急医療援助を行っている。



空き缶のブルはイヤリングに、使用済みの点滴袋はポシェット代わりに彼女たちは何でも器用に作り替える(アフリカ、ソマリアの難民キャンプで) = 「地球のステージ」製作の絵はがきから

## 「自分にできるのは皆に伝えること」

わずか1本の目薬に感激し涙するおばあさん、堤防にうがたれた穴で暮らす父親を失った家族、もらった風船に大喜びで明るい笑顔を見せる少女ロエナス、ゴミの山の中で工夫して暮らしている子どもたち、また殺し合いのない難民キャンプで笑顔を見せる子どもたち、入院中誰も見舞いに来ない東ティモールの少年アカペト(家族は皆争乱で死亡した)、パキスタンの大地震の被災地で桑山さんが差し出した風船を拒絶した13歳の少年ワジーム(彼は風船よりもその時家族に役立つものが必要だった)はあとから「本当は将来写真家になって、きれいなものを写したい」と言った。各地で出会った子どもたちはそれぞれ悲しい経験をしていたが、それでも明るく、被災者同士が、孤児同士が、同じ境遇の人同士が力をあわせて共に暮らしている。時には笑顔さえ見せながら。



背後の堤防の向こう側にできた穴で暮らす一家がある(フィリピンで) = 「地球のステージ」製作の絵はがきから

桑山さんは「自分にできるのは皆に伝えること」という。「地球のステージ」は映像と歌、語りでそんな彼らの姿を私たちに見せてくれる。彼らの存在を、生き様を教えてくれる。そして、考えさせてくれる。ステージは「2 国境を越えて」、「3 国境なき大地」と続いている、まもなく「地球のステージ4」が完成する。